

## 東日本大震災の教訓を今に生かそう①

### 死傷者ゼロの教訓

### 仲間の為に行動した支援行動

東日本大震災から10年。JR 東労組は多くの仲間の実践で、地域と鉄道の復興を創りだしてきました。当時を振り返り、教訓を捉え返し、全組合員でコロナ禍を乗り越えていきましょう！



東日本大震災直後、ライフラインは寸断された中、組合員の安否確認を行うために、瓦礫の中を2人1組になって自転車で組合員宅を周って安否確認を行いました。

また、列車運転中被災した組合員は、地理に詳しい乗客の協力も得ながら避難誘導を行い、乗客・乗務員の死傷者を発生させる事はありませんでした。

### 2021年3月11日発行「地本新聞号外」に掲載された平田純一さん(当時:一関支部書記長)の記事の一部を紹介します

震災当日、支部管内の被災地を乗務していた組合員は、マニュアルの避難場所であった大船渡小学校へ誘導する際、地元の方から、高台にある大船渡中学校がより安全であることを聞き、その場で判断し大船渡中学校へ避難誘導しました。その後、大船渡小学校は津波で被災した事実を知り、土地を知る地元住民の声から判断し命を守る行動をとることができました。気仙沼線で被災した気仙沼出身の乗務員は、海の方へ帰ろうとする高校生を高台に避難させ、その行動が地元新聞に掲載されるなど命を守る行動が評価されました。

JR 北海道労組は地震発生直後に、4トントラック2台で支援物資を届けに被災地に入り、その後多くの地本の仲間が支援物資を直接運んでくれました。また、震災直後はガソリンが不足し、ガソリンスタンドに長蛇の列ができました。そのような中、組織内議員たしろかおる参議院議員(当時)はJR貨物と連携して、奥羽線まわりでガソリンを積んだ臨時列車の運行を実現し、被災地にガソリンを届ける事が出来ました。ライフラインが寸断された中、鉄路が繋がっているからこそできる支援行動を創り出す事ができました。

